

## フライラのひょうたん （ナイジエリア）

昔むかし、あるところに、お金持ちの男の人がいました。なかなか子どもがさずかりませんでしたが、やっと女の子が生まれました。そこで、その子にフライラと名前を付けて、たいせつに育てました。

ある日、お母さんが、フライラをおんぶして歩いていると、ひょうたんがふたつなつていました。大きいひょうたんと、小さいひょうたんでした。フライラは、お母さんに、「あの小さいひょうたんを取つてちようだい」といいました。お母さんは、「あんな小さいひょうたんをどうするつもり。大きいのを取つてあげましょう」といました。フライラは、小さいのがほしいと泣き出しました。

「泣いたつて、取つてあげませんよ」と、お母さんはいつて、そのまま家に帰りました。家に着いても、まだフライラは泣いていました。お父さんが、

「フライラはどうして泣いているんだね」ときました。お母さんは、フライラがまだ小さいひょうたんを取つてほしいといつたことを、話しました。

「いいじやないか。その小さいひょうたんを取つておやり」と、お父さんがいつたので、お母さんはもどつて行つて、小さいひょうたんを取つて来てやりました。

それからというもの、小さいひょうたんは、いつもフライラの後に付いて来て、

「お肉が食べたい、フライラ。お肉が食べたい」といいました。

お父さんは、フライラに、

「ひょうたんを、やぎたちの所に連れて行つておやり」といいました。フライラが、ひょうたんをやぎたちの所に連れて行くと、ひょうたんは、やぎを一頭ぺろりと飲みこんでしまいました。そして、つぎからつぎへとひつじを飲み込み、とうとう、お父さんが飼つていた三百五十頭のやぎを、ぜんぶ食べてしました。そして、フライラの後に付いて来て、

「お肉が食べたい、フライラ。お肉が食べたい」といいました。

お父さんは、フライラに、

「ひょうたんを、ひつじたちの所に連れて行つておやり」といいました。ひつじの所に連れて行くと、ひょうたんは、ひつじを一頭ぺろりと飲みこんでしまいました。そして、つぎからつぎへとひつじを飲み込み、とうとう、お父さんが飼つていた七百頭のひつじを、ぜんぶ食べてしました。そして、フライラの後に付いて来て、

「お肉が食べたい、フライラ。お肉が食べたい」といいました。

お父さんは、フライラに、

「ひょうたんを、牛の所に連れて行つておやり」といいました。ひょうたんは、牛を一頭ぺろりと食べててしまうと、つぎからつぎへと牛を飲み込み、とうとう、お父さんが飼つていた牛を、ぜんぶ食べてしました。そして、フライラの後に付いて来て、

「お肉が食べたい、フライラ。お肉が食べたい」といいました。

お父さんは、こんどは、

「ひょうたんを、らくだの所に連れて行つておやり」といました。ひょうたんは、らくだを一頭ぺろりと食べてしまふと、つぎからつぎへとらくだを飲みこみ、お父さんが飼つていたらくだを、ぜんぶ食べてしました。そして、フライラの後に付いて来て、

「お肉が食べたい、フライラ。お肉が食べたい」といました。

お父さんは、  
「ひょうたんを、牧場に連れて行つておやり」といました。ひょうたんは、牧場で働いていた人たちを、つぎからつぎへとみんな飲みのんでしました。そして、フライラの後に付いて来て、

「お肉が食べたい、フライラ。お肉が食べたい」といました。

こうして、ひょうたんは、馬も、にわとりも、ホロホロ鳥も、かもも、はとも、みんな食べてしましました。残つたのは、フライラとお父さんだけでした。お父さんは、「わたしの他には、もう何もない。わたしてよければ食べてくれ」といました。ひょうたんは、お父さんをぐいっとつかまると、ぱくりと飲みこんでしました。そして、

「お肉が食べたい、フライラ。お肉が食べたい」といつて、フライラを追いかけて来ました。

フライラは、たつた一頭残つていた、雄ひつじの所に、逃げて行きました。その雄ひつじは、お父さんがとても大切にしていた雄ひつじでした。

ひょうたんは、フライラに追い付くと、ぐいっとつかまえようとしました。そのとき、雄ひつじが、ひょうたんに飛びかかって行つて、つのでひとつきました。そのとたん、ひょうたんは、ぽんとはじけて、中から、お父さんが飛び出してきました。

その後から、はとが飛び出しました。かもも、ホロホロ鳥も飛び出しました。にわとりも、馬も、牧場で働いていた人たちも、らくだも、牛も、羊も、やぎも、みんなみんな飛び出して来ましたとさ。

これでおしまい。ねずみの頭を捨てちやいな。

原話..『世界の民話7 アフリカ』中山淳子訳／ぎょうせい  
再話..村上郁